

Title	研究分野開設30周年を迎えて
Author(s)	
Citation	生老病死の行動科学. 2024, 28, p. 19-33
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/95661">https://doi.org/10.18910/95661</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 研究分野開設 30 周年を迎えて

臨床死生学・老年行動学分野でご活躍されていたときの思い出や  
今後のさらなる発展への激励など先輩諸氏から、ご寄稿をいただきました。



## 臨床死生学・老年行動学講座 30 周年に寄せて

大阪大学大学院人間科学研究科  
平井 啓

30 年前、大阪大学大学院人間科学研究科臨床死生学・老年行動学講座の一期生として歩み始めた私にとって、この分野の 30 周年は特別な意味を持つ。当時はまだ新設されたばかりの講座であり、研究の方法論はどうしたらいいのか、活躍できる場はあるのであろうかという思いを持ちながら目の前の研究に取り組んだ思い出がある。特に修士論文の作成においては、人の生死に直接関わることで、一方でそれを数字で表現することにチャレンジすることになり、そこでの学びと経験は、今の自分を形作る基盤となったと考えている。

臨床死生学・老年行動学という分野での教育と研究に携わり、助手・助教としての年月を経て、この分野の成長を目の当たりにすることができた。この分野の経験とそこで得られた知見は、2018 年の公認心理師プログラムの設立に大きく役立った。特に、柏木哲夫先生より教えていただいた全人的苦痛の概念は、公認心理師プログラムでは、包括的アセスメントの概念としてその根幹となっている。現在、このプログラムを修了した多数の学生が公認心理師資格を取得している。これは、この分野で取り組んできたことの大きな成果であると考えている。

2022 年、私は大阪大学での研究成果をもとに CoBe-Tech 株式会社を設立し、心理学・行動科学の社会実装という新たな領域での活動を開始した。この会社は、臨床死生学・老年行動学分野のような心理学・行動科学を学んだ人が、その知見を直接活かせる場がなかなかないという現状をなんとかしたいという思いで設立した。現在、CoBe-Tech 社では、比較的順調に受注を増やしており、業務拡大のために新たな人材を採用したいと考えている。そこで人間科学研究科・人間科学部出身者、特に臨床死生学・老年行動学講座の出身者もぜひ採用できればと考えている。

この 30 年の経験から、私は、学び続けることの重要性を強調したい。臨床死生学・老年行動学の研究は常に進化しており、新しい知見が次々と生まれているであろう。次の 30 年も、私たちの研究分野がさらに多くの学びと発見をもたらし、社会に貢献していくことを願う。

## 臨老 30 周年おめでとうございます

神戸大学人間発達環境学研究科  
増本 康平

この度は臨床死生学・老年行動学講座開設 30 周年おめでとうございます。私は大学院生と助教の 7 年半の間、2007 年の 9 月まで臨老でお世話になりました。私が臨老で過ごした時代は、まだ高齢「化」社会で、高齢者を対象とした研究への関心はそれほど高くなく、心理系の学会に参加しても高齢者研究はほとんどありませんでした。超高齢社会となった現在では、高齢者を対象とする研究者だけでなく、そういった研究に関心をもつ学生、企業、行政の方も増えていると感じています。

認知機能に関する研究については、日本ではこの 20 年で、加齢が認知機能に及ぼす影響を明らかにすることから、加齢が認知機能に及ぼす悪影響をどう予防するか、ということに重きが置かれるようになりました。老いによる低下を防ぐために努力することは大切ですが、一方で、予防のメッセージには、「老いることは衰えること」という意味合いがどうしても含まれます。そのようなメッセージをさまざまな媒体から受け取った現在の日本人は、若い世代だけでなく、高齢者世代でも、老いることについて否定的なイメージを強く持つ人が増えているように感じます。後ろ向きに歳を重ねるのではなく、前向きに円熟を目指して歳を重ねるには、老いに向き合い、適応するための、広範で総合的な知見が必要だと最近実感しています。

超高齢社会のウェルビーイングを実現するためには、研究と専門知識を持った人材の育成を欠かすことができません。その先導役として、臨老のさらなるご発展と、臨老のみならず、OB・OG のみなさまのご活躍を心より祈念しています。

## 生老病死の実体験を通して

中京大学現代社会学部  
中原 純

講座開設 30 周年、心よりお祝い申し上げます。私は 2004 年 4 月に博士前期課程 1 年として、研究室のメンバーとなりました。その後、大学院生として、また助教として、9 年間、研究室に在籍しました。この 10 年近い歳月の中で、私自身、就職、結婚、子どもの誕生、近親者の病気、死別、介護といった様々な事柄を経験しました。学生時代にはこうした経験もなく、ただ生老病死の理論を勉強しただけで、恥ずかしながら、全てをわかった気になっていたように思います。一方で、若い時に学んだ死生学や老年学は、その後の人生の中で直面した生老病死の体験に、より深みを与えてくれました。研究室での学びは、単なる研究上の知識や技術ではなく、人生を豊かにしてくれるかけがえのない学びであったことを、身をもって知りました。

私は、研究室を離れた今でも、OB・OG と研究について議論する機会に恵まれています。そして、いまなお身近な仲間と高度な議論ができることを、ありがたく感じています。研究室のホームページによると、研究者となった卒業生は実に 34 名にのぼるとのことです。すなわち、年に 1 名以上の研究者が、研究室から輩出された計算になります。毎年これだけの人材を育成し世に送り出してきたことは、これまでスタッフとして研究室を支えてこられた先生方のご尽力の賜物だと思いますし、研究室の最も大きな功績と言っても過言ではないように感じます。私自身、先生方に育てていただいた 1 人でもあり、一時期は育てる側としてもわずかながら貢献できたこと、大変誇りに思っています。

最後になりますが、研究室の益々の発展を祈念すると同時に、私自身も OB としての誇り・責任を持ち、これからも研究に邁進したいと思いを。

## 「りんろう」講座開設 30 周年に向けて

鹿児島大学法文学部  
安部 幸志

臨床死生学・老年行動学分野の講座開設 30 周年にあたり、謹んでお祝いを申し上げます。振り返りますと、私が博士課程を修了したのが 2003 年、ポスドクとして在籍したのが 1 年でしたので、約 20 年前の修了生・卒業生の一人ということになります。その当時は、柏木先生、恒藤先生からのご指導を受けつつ、厳しい先輩方や仲間達との切磋琢磨の日々を過ごしており、20 年経った今でも、その時に学んだ知識や、研究に対する視座を大切にしつつ、日々の業務に邁進しているところです。

現在、私は南九州の鹿児島大学で勤務をしておりますが、こちらに着任してある先生から話しかけられた時、驚いたことがあります。その先生は本講座出身でもなく、阪大出身でもないのですが、「先生はりんろう出身なんですよね？」と話しかけてくれたのです。「りんろう」という略称が、我々仲間内だけでなく、他大学の先生にも広まっているということを知り、驚きと同時にうれしくも感じました。

「りんろう」講座開設から 30 年、次の 10 年 20 年を考えると、やはりこれまで築いてきた「りんろう」の名をより高め、発展させていくことが必要だと思います。現在講座に所属している学生・院生だけでなく、私を含めた卒業生や修了生の一人一人が「りんろう」の名を背負っていることを自覚し、学生の頃のように切磋琢磨をしていきたいと思っています。

最後になりますが、改めて、臨床死生学・老年行動学講座のさらなる飛躍を心よりお祈り申し上げます。

## 臨床研究の原点としての臨老

梅花女子大学心理こども学部心理学科  
森本 美奈子

講座開設 30 周年おめでとうございます。私も講座を出て、教員生活 20 周年を迎えました。学部 3 年時に当時 10 名いた同期とともに「臨床」という言葉に惹かれ、柏木哲夫先生率いる臨老の門戸を叩いたことが昨日のこのように思い出されます。淀川キリスト教病院の巡回実習は未だ鮮明に記憶に残っており、まさに死の床の実習で、それぞれの専門性を尊重したチームケアを実践、時にはユーモアを交えた川柳を一緒に詠まれ、あたたかい空気のなか死にゆく人々をお見送りするその瞬間を目の当たりにした時の体感が、まざまざと思い出されます。大学院では、高齢者の方や認知症の方々のその人らしさとは何か、また影響要因としての家族に焦点をあてて研究活動に携わりました。人がその人らしく生きるためには、家族との適度な関係性が関わっていることが実証的に示され、家族環境へのアクセスに惹かれたことが、私の臨床・研究活動の基盤になっています。

現在私は心理臨床家の育成に携わっていますが、その原点となる体験が臨老にありました。臨床活動では、今日の前で困りごとを抱えた、ゆりかごから墓場まで全ての年代の地域の方々、また学生や自身も含め、家族という生物システムの最適解をみつける日々です。その中で気づかされる多様な切り口からの学びやアイデアの蓄積から、「臨床に役立つ研究をなさい」という柏木先生の教えを引き継いで、学生たちや仕事仲間と研究活動、研修企画等に臨んでいます。臨床死生学・老年行動学の研究室では、チームワークも豊かに、超高齢社会を生き抜く上で重要なテーマを多角的に扱っていただけることと思います。対象やテーマが異なれども全ては繋がっており、また関わりのある人々との出会いやご縁を大切に、今後の皆様方の益々のご活躍とご発展をお祈りしております。

## 大阪大学と皆様の一層のご発展を 祈念いたします

関西大学  
森田 亜矢子

臨床死生学・老年行動学講座開設 30 周年、誠におめでとうございます。

貴講座は、日本初となる人間科学部誕生 20 年の節目にあわせ、当時すでに淀川キリスト病院のホスピス長としてご活躍されていた柏木哲夫氏を教授にお迎えして開設されました。「人間とは、何か?」という問いを探求し続ける人間科学部のなかにあつて、貴講座は、よりよい「生 (life)」を実現するために、すべての人が避けることのできない「死 (death)」および「老い (aging)」と向きあいながら、人生の重要な諸問題とその過程、折々の心理現象とその背景にあるメカニズムを解明する基礎研究に取り組み、介入的手法を用いた応用研究を展開し、「いのち」と「くらし」を大切にする未来社会の創造に、重要な役割を担ってこられました。

貴講座は、ホスピスケアや死生学について学ぶ機会を、文学部出身の私に与えてくれた貴重な機関です。大学を出て 10 年余を経ても、貴講座で学んだ知識を学生たちに伝え、生命倫理を扱う授業科目を担う機会に与ることができるのは、大阪大学の貴講座との御縁に恵まれたおかげです。心から有り難く感じております。私を教え導いてくださった先生方に、深謝申し上げます。

創立 100 周年を見据え躍進する大阪大学と、貴講座の皆様の一層のご発展を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

## 「一生臨老します」宣言

鈴鹿医療科学大学保健衛生学部医療福祉学科  
中西 健二

講座開設 30 周年おめでとうございます。30 年間に渡り、学生指導と講座運営にご尽力賜りましたすべての臨老の先生方へ心より感謝申し上げます。

臨老を卒業して 20 年以上経ちますが、私にとって臨老は思い出として語る過去の存在ではなく、全くもって現在進行形の存在です。例えば、学会では臨老の先生方や先輩、後輩の方々とお会いしますし、2 か月前に某学会のシンポジウムで講演した内容は、自分の卒論テーマを含むものでした。また、大学では臨床心理学や健康・医療心理学を教え、週 1 日は緩和ケア病院で心理職として働いています。特に病院での臨床において、学生時代に講義で拝聴した柏木先生の言葉を「あの言葉はこういう意味だったのか!」と思い出すがしばしばあり、今も学びは続いています。

このように私の仕事は臨老での学びの延長線上にあるのですが、仕事以外でも臨老での学びはずっと自分の傍らにあり、学生時代よりもむしろ今の方がずっと身近な存在になっています。なぜなら臨老は誰もが生きていく中で直面する「生老病死」を研究対象としているからです。現在、介護と子育ての問題を同時に抱えて生きていくことの大変さを思い知り、増えてきた白髪に老いを感じています。そして、一人称・二人称の問題としての病と死が、そう遠くないうちにやってくるでしょう。いずれの問題も大きな苦痛ではありますが、一方で「何とかなるんじゃないか」という変な自信もほんの少しだけあります。それはきっと臨老で生老病死を科学することについて学び、今もその学びを続けているからです。最後に、臨老での学びを一生続けていくことをここに宣言し、学びの機会を与えてくださった臨老の益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。

## 本流であれ

京都先端科学大学  
辰巳 有紀子

講座開設 30 年、おめでとうございます。

私が臨床死生学・老年行動学講座にお世話になっていたのは開設数年の頃でした。毎日 24 時間誰かしら研究室にいて議論に花が咲いていたり、不要になった質問紙を燃やして皆で焼き芋をしたり、研究合宿に行ったり、また論文の提出期限に限って誰かしらのデータが消え、プリンタが壊れ、そういったトラブルを一緒に乗り越えたことさえも、懐かしい思い出です。程度の差はあれ、それぞれの研究室メンバーにとって研究と生活が密着していて、とても熱量の高い研究室だったことは間違いありません。引き継いだ先生方や研究室メンバーの皆様のご尽力により、今もその熱量は失われていないと拝察します。

柏木哲夫先生は日々研究について悩み考える我々に対し、あたかも「臨老船」の船長のように、たくさんの指針を与えてくださいました。その中でも特に心に残るのは、「本流であれ」という指針です。ともすれば、主流となっている大勢の意見が正しいように思えることもありますが、自分自身で真理を見極め、本流をなさい、それがやがて主流になるから、と教えてくださいました。

研究室で共に時間を過ごしたメンバーはいまそれぞれの分野で本流を貫き、大活躍しています。私自身は看護師との共同研究の中で、身体的側面も含めたアセスメントの重要性を痛感し、看護の道へとスライドしましたが、学会などで研究室メンバーの活躍を見ていまだに刺激を受けています。これからもずっと刺激を受け続ける、そんな研究室であることは間違いないと確信しています。

## 臨老 30周年おめでとうございます！！

近畿大学総合社会学部  
塩崎 麻里子

臨床死生学・老年行動学研究分野 30周年、誠におめでとうございます。心ある先生方によって発展し、また脈々と受け継がれてきた臨老が、30歳を迎えたとのこと、本当に嬉しく思います。

私が臨老に在籍していたのは2001年からの5年間です。今からもう20年も前だということに驚かされます。当時と今では、「死」や「老」に関する扱われ方が大きく変わったように思います。例えば、この20年で日本の高齢化率も、17%から29%に飛躍的に伸びていますが、世の中で、老いや死がより身近になり、誰もが必ず通る老いや死と向き合うために、知識を得たいという気運が高まっているように感じます。SNSで病と共に生きるリアルを発信して、多くの人に影響を与える有名人がいます。店頭におかれている書籍も、高齢者をターゲットにした“老いてからの生き方”を扱ったものが本当にたくさんあります。30年も前に、人間が生まれ、病になり、年を重ね老いて、死ぬというプロセスを科学的に研究していた諸先生方が、学生にそれを伝え、学問として深く学ぶための研究室開設にご尽力されたことは、先見の明をお持ちであったと強く感じますし、その研究室で学べたこと、頂いたご縁に感謝の気持ちでいっぱいになります。

老いや死を、そしてどう生きるかを探求していくことは、何も病気になってから、あるいは老いを実感してからでなくてもできるはずで、若い世代が、臨老の得意とする分野に興味をもち、超高齢社会を元気にし、自身が老いと向き合った時、死を迎える時に後悔のない人生を生き切ってくれるように、微力ながら教員として研究と教育に精進していきたいと思っています。臨老関係者各位の益々のご健康、そしてご活躍を心よりお祈り申し上げます。

## リンロウの思ひで

武蔵野大学  
出野 美那子

この度は、講座開設30周年おめでとうございます。このような機会に寄稿させて頂けますこと、大変光栄に存じます。思い返せば97年に学部で講座配属となり、07年度修了まで11年、青春時代のほとんどの時間を臨老で過ごしました。なお本稿では、親しみを込めて臨老(リンロウ)と呼ばせて頂きます。

当時は振り返ると、臨老は学部生、院生の垣根なく交流が深く、私にとっては第二の実家のような場所でした。仲良しが高じて、徐々に、講座の名を借りたサークル活動に力を入れ始めました。よく呑みにも連れて行って頂き、他講座の友人からは「臨老は、気づくといつも飲み会してるね」と言われる程でした。講座の部屋では、鍋、クリスマス、誕生日、パジャマ、そば、梨など、「パーティ」と名の付くものは一通り催しました。冬には、お揃いのフリースを皆で着ていたこともあり、果ては、テニス部を作ろうと画策したことも。部結成には至りませんでした。柏木先生、恒藤先生もゲスト参加してくださって、リンロウテニストーナメントを開催し、熱戦を繰り広げました。

もちろん研究においても、このような未熟者にも関わらず、温かい人間関係の中で厳しくご指導頂きました。特に先輩方には、分析や論文執筆について丁寧にお教え頂き、感謝の念に堪えません。先輩方から頂いたご指導は、自分が先輩となった時に後輩に恩送りすべきところ、在籍当時にそれができていた自信は全くないことが心残りです。

豊かで賑やかな思い出をくださった臨老の皆様、改めて感謝申し上げます。今後も、豊富な資源と広い視野をお持ちの先生方の元で、学内の交流のみならず、学外や世界の研究者との交流、研鑽がなされ、益々ご発展なさることと確信しております。



## 臨老と私

愛知県立大学看護学部  
河村 諒

臨床死生学・老年行動学研究分野の講座開設 30 周年、おめでとうございます。私の出身中学校が統廃合でなくなったこともあり、出身講座が続いていること、そしてその歴史の中に私も存在できたことを非常に嬉しく思います。

講座にいた時のことは今でも色濃く思い出されます。研究テーマに困っていた時、藤田先生に声をかけてもらい研究会に参加しはじめたこと。朝研究室に行ったら寝袋で先輩が床で寝ていたこと。時には研究室に泊まりながら同期とワイワイ論文を書いていたこと（そして騒ぎすぎと先輩から叱られたこと）。院ゼミでの発表後に阪大病院のスタバで解放感に満ちながら先輩とお茶したこと。先輩や後輩、先生たちが料理を作りつつ論文執筆を支えてくれたこと（ご飯とても美味しかったです）。修論とは別のテーマになる興味ある研究に携わせてもらえたこと。自分は先生、先輩、同期、後輩、環境に恵まれていたとつくづく思います。

こうして臨老での思い出をふり返り改めて感ずること、そして今も大切にしていることは、人との出会いや繋がりを大切にすることです。臨老に所属していた時も、そしてこれまでも、周りの人たちの助けのおかげで自分はやってこれたと痛感しています。自分は偉そうなことを言える身ではないですが、講座の発展ということだけではなく臨老のメンバーとして、せっかく出会い、繋がったご縁として、関係性を保ちつつ大切にしてもらえたらと思っています。

## 臨老での経験と生涯にわたる学び

武庫川女子大学心理・社会福祉学部心理学科  
太子 のぞみ

臨床死生学・老年行動学研究分野（通称：臨老）開設 30 周年、お祝い申し上げます。2007 年に前期課程に進学した当初から藤田綾子先生、平井啓先生、増本康平先生、年度途中から権藤恭之先生に、高齢者心理学そして研究との向き合い方についてご指導頂きました。軽度認知症に関心を抱いていた私は、藤田先生にお力添えを頂き、グループホームで実習する機会を頂きました。平井先生は、研究に必要な知識を伝授下さると共に、方向性に迷う私を支援して下さいました。増本先生は、実験手法を用いた研究経験の浅い私に対して、展望的記憶を中心にご指導下さり、日常記憶に関心を抱く契機となりました。さらに、権藤先生の海外研究者とも垣根なく、迅速に連絡する姿勢に後押しされ、フィールドの開拓や課題の原版開発者にコンタクトをとる機会を得ました。特に、オーストラリアの Rendell 先生との出会いは大きく、国際会議参加時には Australian Catholic University を訪問させて頂きました。

後期課程では、応用行動学研究分野で高齢運動者にもフィールドを広げる一方で、認知加齢研究に携わる機会を継続頂けたことは非常に貴重で有難いことでした。博士論文では、Baltes の SOC 理論を踏まえて、補償という着眼点で研究を進め、佐藤眞一先生にもお世話になりました。2015 年に共通助教として戻ってきた際には、同じく助教の先生方や大学院生とも交流しながら教育経験を積ませて頂きました。同志社大学での RPD（特別研究員）を経て、現職の武庫川女子大学では、生涯発達の観点で学びを深めながら、女性の育成に励んでいるところです。

今回貴重な機会を頂き、臨老時代を回顧すると、所属したのは短期間であったにもかかわらず、臨老関係者の皆様のご縁を繋いで下さったことを実感し、感謝の念に堪えません。自分の不甲斐なさを痛感してばかりですが、生涯を通して経験をすべて糧にできる可能性があるところも臨老の学びの良い側面かもしれません。臨老のますますの発展と皆様のご健勝をお祈りいたします。

## 「りんろう」のご発展を願って

安田女子大学  
田淵 恵

臨床死生学・老年行動学研究分野の講座開設30年、誠におめでとうございます。この素晴らしい節目を迎えられたこと、心よりお祝い申し上げます。

私の研究生生活は、臨床死生学・老年行動学研究分野、通称「りんろう」で始まりました。大学2年生の時、どきどきしながら研究室に初めて足を踏み入れたときにいただいた、先生方や先輩方が作ってくださったそばめしとおでんを、今でも鮮明に覚えています。学部時代は藤田綾子先生、恒藤暁先生、平井啓先生、増本康平先生、そして大学院時代からは権藤恭之先生、佐藤眞一先生という偉大な先生方にご指導ご鞭撻いただき、また多くの先輩方・後輩の皆様を支えていただきました。研究者人生を歩む中で、憧れる存在として頭に浮かぶのはいつでも「りんろう」の先生方、先輩方ですし、大学教員として学部ゼミ生を指導する際も、思い出すのはお世話になった「りんろう」の先生方の口癖です。「りんろう」の研究室に行けばいつでも誰かがそこにいて、「生老病死を科学する」ことに夢中で取り組み、最先端の知に触れている、そんな素敵で活気溢れる場所で大学時代を過ごすことができた幸せを、今改めてかみしめています。今後新たに「りんろう生」となる後輩たちにとっても、きっと臨床死生学・老年行動学研究分野の研究室はそんな憧れの場所となるのではないのでしょうか。

臨床死生学・老年行動学研究分野は、今後も引き続き世界に求められる重要な分野であると思います。最後に、臨床死生学・老年行動学研究分野の今後の更なるご発展と、みなさまのご活躍を、心よりお祈り申し上げます。

## 未来につなぐ臨老での学び

滋賀医科大学医学部社会医学講座  
山木 照子

講座開設30周年おめでとうございます。

私は2007年4月から2013年3月まで、学部・修士課程の学生として臨床死生学・老年行動学研究分野で学びました。入学前は外資系情報・通信企業で勤務していましたが、人の生死について深く考える経験をきっかけに、第3年次編入学で講座に受け入れていただきました。

臨老で過ごした6年間は、まさに至幸の日々でした。最先端の研究に参加させていただきながら「研究者の仕事」を間近で見て学ぶ経験が、進みたい道の方向性は固まっているものの、どう実現していったらいいかわからない状態で飛び込んだ私に、地図と靴を与えてくれました。「往復400kmの遠距離通学」「家庭があり家事全般を担当」「出産、生後半年から子連れ通学」の事情が重なり、毎日が綱渡りの中で、泣き続ける子どもと一緒に涙したことも数知れません。講座の皆様、支えてくださった方々のおかげで、それでも前を向いて進んで来ることができました。あたたかくご指導いただいた先生方、研究について一緒に考え、お忙しいなか力を貸してくださった先輩・同期・後輩の皆様。講座で一緒したことがなくても臨老のご縁で快く助けてくださるOB・OGの大先輩方。臨老での日々があったからこそ今があることを、深い感謝とともに実感しています。

修士課程修了後は医学博士課程に進学し、現在、卒前医学教育に関わっています。主に担当してきたのは、医療面接（いわゆる問診）実習などの授業や、学科全体で実施する客観的臨床能力試験です。人の命に深く関わり健康を守る医師となる学生さんの肩越しに、彼ら彼女らが将来助けていくであろう患者さんやご家族の姿を見ながら、臨床死生学・老年行動学研究分野で学んだ大切なことを、これからも伝えていきたいと思います。

講座ゆかりの皆様の、お健やでのご活躍と益々のご発展を、心より祈念しております。

講座開設 30 年に寄せて  
— 東京から阪大に通った日々 —

東京都健康長寿医療センター研究所  
稲垣 宏樹

講座開設 30 周年、誠にありがとうございます。  
私は平成 22 年（2010 年）度に当講座の後期博士課程に入学をしました。すでに現在の所属（東京都健康長寿医療センター研究所）に研究助手として入職し十数年が経っており、40 歳を目前にして、研究者として博士号を持っていないと今後の研究キャリアにおいて何も良いことはないと考え、仕事を続けながら大学院に通学する決意しました。この「東京から大阪に通う社会人院生」という厄介な立場の私を、佐藤眞一先生と権藤恭之先生は、以前からの知り合いだったとはいえ、快く（かどうかはわかりませんが）受け入れてくださり、3 年間でしっかり指導、卒業をさせてくださいました。お二人には本当に感謝の念しかありません。

また、在学中、十数年ぶりに体験する大学での講義は、研究所に所属して以来仕事としての研究に従事していた身としては、懐かしくもあり新鮮でもあり、非常に刺激的なものでした。他の学生の皆さんの研究発表や質疑応答は、未熟な面もありながら研究に対する純粋やひたむきさに溢れていて、（すでに入学の動機からして不純な）私に初心というか研究に対する姿勢を思い出させてくれました。時をおいて大学院に所属したことによる思いがけない収穫でした。

さて、臨床死生学や老年行動学を含む老年学は、現在の超高齢社会においては極めて重要な学問領域ですが、国内で講座を開設しているところはまれです。それを 30 年も前から実行し発展させてきた当講座に、短期間とは言え所属できたことは私にとって誇らしく喜ばしいことです。最後になりましたが、貴講座の今後のますますのご活躍とご発展を祈念しております。

フロー経験をもたらず場

O.P. Jindal Global University, India  
石岡 良子

2008 年 4 月、私は大学院生として臨床死生学・老年行動学（以下、臨老）に所属しました。この分野を選んだのは、「老いる」とはどういう現象なのかを深く理解したいという願望からです。研究初心者だった私ですが、臨老は私をある種の「フロー状態」へと導きました。Mihaly Csikszentmihalyi によると、フローとは、困難だが達成可能なことに完全に没頭し、他のことがどうでもよく思える状態を指します。臨老での私の経験は、教員、大学院生、学部生が共に生老病死に関する知識や研究技能を磨くことに集中できる環境でした。

特に、修士課程で参加した「認知加齢研究会」と「高齢者適応研究会」では、展望的記憶、認知の予備力、ポジティブティ効果、世代性、超越などの概念を研究するプロジェクトに関わりました。これらの研究会の成果は、2010 年に SONIC という学際的な長期縦断研究へと発展しました。SONIC での活動は、学問の壁を越え、世界中の研究者とのネットワークを築く機会となりました。

臨老を卒業後、多くの方に助けて頂きながら、海外での研究機会を模索しました。結果として、東洋的な価値観を共有するアジアの研究機関であるインドで教育研究に携わる機会を得ました。2022 年からインドで生活し、哲学、神話、宗教、歴史など人文的な観点に深い関心を持つようになりました。老年学や心理学は科学的な知見だけでなく、人文的要素も重視する分野です。私たちは、老いることの多様性と複雑さを理解し、それに対応する新たな考え方や方法を開発し続ける必要があります。

臨老が、人文的および科学的な臨床死生学・老年行動学の教育と研究の世界的な拠点として、その役割を果たし続けることを強く信じています。そして臨老で学ぶ学生がフロー状態を経験できる場であり続けることへの期待を胸に、30 周年の節目を祝福します。

## 大学院生だった私から大学院生に向けて

京都府立医科大学  
上野 大介

私は2005年～2015年に臨老でお世話になりました。2013年に後期課程を満期退学し、専門学校の特任講師をしながら、最後はなんとか学位をいただくことができました。その間、藤田綾子教授（当時）の指導のもと、2006年からは産総研関西センターの脳磁図を用いた増本康平助教（当時）の研究補助に携わり、2008年のCognitive Aging Conferenceでは赴任早々の権藤恭之准教授（当時）に同行したり、2010年には赴任早々の佐藤眞一教授（当時）に私の健康不良のため家庭訪問いただいたり、その後復帰して仕事の合間に学位論文のご指導をいただきました。10年間の後半は所々の記憶がなく、臨老の後輩・同期・先輩や先生方に多大なるご迷惑をお掛けしました。当時を振り返るとお恥ずかしい限りで、今こうして研究を続けられているのが自分でも不思議に思うことが多々あります。

お世話になった方々に直接恩返しするのは難しく、次の世代につなげていくことが恩返しになればと思っています。これから大学院進学を志す方に、私の経験から得た教訓めいたものを記します。研究が面白い、研究者がカッコいいと感じている方は大学院進学をお勧めします。研究職は私にとってこの上ない仕事になりましたが、研究を生業とするには相当の体力、気力、財力と運が必要です。また、大学院に進学したならばこれまで身につけた知識や経験を一旦手放して一から学んでください。研究室には各々のテーマや進め方があり、視野を広げるチャンスだと思ってください。そして、色々と困難に直面すると思いますが、見てくれている人が必ずいます。

最後に臨老がさらに発展することを祈念して、未熟な大学院生だった私から次世代の大学院生への激励の言葉とさせていただきます。

## 研究室での学びと出会いに感謝を込めて

尚綱大学短期大学部  
中里 和弘

講座開設30周年、心よりお祝い申し上げます。私は、他大学の学部を卒業後、大学院生から研究室にお世話になりました。臨床死生学・老年行動学を学ぶ大学院は少ないこともあり、大学院での学びは大変興味深く、今の教員生活を送る際の礎になっています。大学院において多くの先生方に手厚い指導を頂いたこと、また多くの仲間に出会えたことに深く感謝をしています。当時を振り返ると、大学院での学びが将来にどう繋がるのか想像がつかないことで不安を感じ、一人もがいていたような時期もあったように思います。ただし、そのような経験は何一つ無駄なものではなく、今の私にあっては意義あるものであったと考えています。

私も40歳を過ぎ、ユングのいう「人生の正午」を回りました。ユングが生きた時代と今では、寿命や人生観は異なるかと思います。ただし最近では、私もこれまで生きた時間とこれからの生きるであろう時間を対比して考えることがあります。そのような意味では、私を指導して下さった諸先生方や先輩方のこれまでの歩みは、私にとっては心強い「道しるべ」になっています。

臨床死生学・老年行動学研究分野の研究は、人間が存在する上で目をそらすことのできない事柄を扱うと同時に、社会の課題に直結した内容であると思います。以前に比べて「生老病死」を扱う大学院は増えたかもしれませんが、臨床死生学・老年行動学研究分野が大阪大学大学院人間科学研究科として存在する価値は唯一無二のものであり、私にとってこの研究室の卒業生であることは誇りです。研究分野の開設と発展を導いた先生方や卒業生の「臨老の精神」は、現在、研究室で研究活動に励んでいる学部生や大学院生にも息づくものと思っています。臨床死生学・老年行動学研究分野のますますのご発展をお祈り申し上げます。

## 院生時代を振り返って

南山大学 社会倫理研究所  
辻本 耐

臨床死生学・老年行動学研究分野の研究室が開設されて 30 周年を迎えられましたこと、誠にありがとうございます。

元々、私は別の研究室で、「死」の認知的発達に関わるテーマに取り組んでおりました。そのため、「死生学」を冠するこちらの研究室には、時折、資料をお借りするために顔を出していました。その後、不思議なご縁で、博士後期課程の途中で異動となり、本講座でお世話になることになりました。異動した当初は、知り合いも全くいませんでしたし、以前の研究室で学んできた方法論との違いに戸惑いました。しかし、院生の皆さんに暖かく迎えていただき、そして何よりも先生方に丁寧にご指導をいただいたことで、充実した研究生生活を送ることができ、無事に博士論文を提出することができました。思い返すと、「りんろう」への移籍が私にとって大きなターニングポイントになりました。

特に、子どもを対象に調査をしてきた私にとって、高齢者研究に携わることができたのは、大きな刺激となりました。当時、大阪大学中之島センターで月に 1 回開催されていた「臨老研究会」では、他大学で高齢者研究に取り組んでおられる先生方の最新の研究動向を伺うことができました。また、高齢者を対象とした調査にも関わらせていただき、その調査方法だけではなく、統計的な処理を含めて、大変勉強になりました。こういった経験のおかげで、私の研究の幅が広がり、現在の研究活動に至っているのだと思います。

院生時代を振り返ると、研究活動のことだけではなく、さまざまな懇親会やゼミ合宿でのレクリエーション、院生室での院生同士の語り合い、盛大に送り出していただいた卒業式などなど、思い出は尽きません。高齢者研究の最前線として、また、貴重な学びの場としての臨床死生学・老年行動学研究分野が、今後ますますご活躍されますことを念じております。

## 研究分野の成熟期

### The coming of age of a discipline

国立長寿医療研究センター  
中川 威

講座開設 30 周年にあたり、心からお祝い申し上げます。老いと死に関する研究分野が、萌芽期、成長期を経て、成熟期へ移行し、老いと死のあり方の探究と社会課題の解決に資するようにさらに発展していくことを願っています。

2018 年に講座開設 25 周年を迎えました。その後間もなく、2020 年 1 月 15 日に日本で最初の新型コロナウイルスの感染者が確認され、私たちは感染症流行という歴史的な出来事を経験することになりました。感染症流行下で生活のさまざまな状況で大きな影響を受け、中には、比べようもない苦しみに遭った方もおられるかもしれません。それでも、苦しみに遭いながらも、30 周年という時を共に迎えられることを嬉しく思います。

25 周年の時にも、30 周年の時にも、過去を顧みて、未来を臨むと、本紀要の名称である「生老病死の行動科学」に表れる講座の志に立ち返ります。

紀要に命名されたのは、当時教授を務められていた藤田綾子先生です。藤田先生は、紀要の呼称の理由を次のように書いておられます。

「ご周知のように「生老病死」は「人間がこの世で避けることのできない四つの痛み」と云われていますが、その痛みへの挑戦は人それぞれであり挑戦の仕方によっていろいろな人生の歩みが生まれます。

私たちの研究室は人生への様々な挑戦の仕組みや意味を究明することによって、人々が少しでも痛みから開放される解決の糸口を見つける手助けになりたいという思いを込めて命名しました。

講座での研究と教育を通じた学びが、今後も変わらず、これまで講座に在籍された方、現在在籍されている方、そしてこれから在籍される方の人生の羅針盤になるようにと祈っています。

## 臨床死生学・老年行動学研究分野の強み

島根大学人間科学部  
豊島 彩

臨床死生学・老年行動学研究分野、講座開設 30 周年、心よりお祝い申し上げます。

5 年前に 25 周年記念号を助教として編集したのがついこの間のような気がして、当時は自分が執筆する側になるとは考えていませんでした。臨老に所属している期間、私は自信の重大なライフイベントを多く経験し、それらを乗り越え現在の私がいるのも、研究室で学んだことが影響しています。

その中でも、大学院在学中にアメリカのアイオワ州立大学に研究留学に行くことができたのは、私の人生の転機となりました。それまでは、自分の実力に自信がなく、研究者になりたくても、研究職に就くのは難しいのではないかと考えていました。そんな漠然とした不安を抱えていた時に、権藤恭之先生の共同研究者であった、Peter Martin 先生との出会いや助成金が獲得できたことが運良く重なり、留学に行くことが決まりました。当時、自分の人生の歯車が急に回り始めた感覚を今でも覚えています。研究留学をしたことで、初めて国際誌に論文を載せることができましたし、現地に行って海外の研究者と直接コミュニケーションをとることの重要性を知りました。

現所属の島根大学人間科学部では、私は国際センターでの業務も兼任しており、留学生の受け入れや国際交流のサポートをしています。つながりのないところから交流を始めることは非常に難しく、大学の研究室として国際的なネットワークを持っているところが、現在の臨老の強みになっています。OG として現役生と話したときに、留学に行かれた方のお話を聞くととても心強いです。これからも、臨老が国際的に活躍されることを期待しています。留学や国際交流に興味がある方はぜひチャレンジしてください。

## 臨床死生学・老年行動学研究分野での 5 年間

弘前大学大学院保健学研究科  
大庭 輝

「博士取る気があるなら阪大においでよ」と、明治学院大学で行われていた食の生涯発達研究プロジェクトで佐藤眞一先生にお声がけいただき、意を決して関東から臨老の門を叩いたのが 10 年前になります。その後博士後期課程の院生として 3 年間、助教として 2 年間臨老で過ごさせていただきました。

社会人大学院生だったため、日中は高齢者施設で臨床心理士として働き、仕事が終わってから大学に来て研究という日々でした。体力的、精神的に大変でしたが、臨老の院生はいつも夜遅くまで研究をしており、院生室はいつも明るく賑わっていたため院生室に行くのが楽しみでもありました。もし真っ暗な部屋で一人孤独に研究を続けるという状況であったならば、途中で挫折してしまっていたかもしれません。仲間の大切さが身に沁みました。

修了後は京都の大学に勤めていましたが、助教として着任する機会をいただき臨老に戻ってきました。この時の思い出は何といっても 2 つの学会大会運営を同時に行ったことです。何をどう進めたらということから考え始め、あれやこれやと準備を進めたことをよく覚えています。開催した学会の一つは数年後に自分が大会長となり再び準備に追われることになりましたが、臨老での経験が生き、無事盛会に終えることができました。

5 年間を通じて、臨老では多くのプロジェクトや研究室運営を通じて様々な経験を積み重ねてもらいました。当時は、これは何かの役に立つのだろうか？などとも考えることもありましたが、振り返ってみるとその時の経験が今につながっていると感じています。現役生も同じような思いを抱くことがあるかもしれませんが、臨老での一つ一つの経験を大切にしてもらいたいと思います。

この度は講座開設 30 周年おめでとうございました。臨床死生学・老年行動学研究分野の更なる発展を祈念いたします。

## りんろうの扉を開く

大阪大学大学院人間科学研究科  
松井 智子

私は3年次編入で臨床死生学・老年行動学研究室（以下、りんろう）へ入りました。受験の際、願書を提出する段階で研究室を選択する必要があり、当初、私は臨床心理学の研究室を選択する予定でした。ふと、願書を書く前に他の研究室についても知りたくなって、一通り見てみようと思い立ったのです。そして「臨床死生学・老年行動学」を見つけ、ここで学びたい！と、ピンときて、りんろうを選択することにしました。その後入学が叶い、りんろうで過ごす中で、恩師、一生の友人、先輩、後輩と出会いました。そして、研究に出会い、研究において困難を乗り越える中で楽しさを見出すようになり、いつの間にか臨床だけでなく研究も自分の人生の重要な要素となっていたのです。好奇心がなければ、りんろうで過ごすことがなければ、おそらく今の文章を書く機会もなかっただろうと思うと不思議なものです。

私のキャリアを振り返った時に、りんろうの研究室を選択したこと以外にも、ターニングポイントの多くは好奇心や偶然によるものだったと感じます。しかしながら、引っ込み思案な私は、1人でいたらそれらから生まれたチャンスを掴まなかったかもしれません。卒業生・修了生も含めて、りんろうには、自分にできるだろうかと不安になった時に背中を押してくれる人がいます。だからこそ、様々なことに挑戦でき、想像していたよりも遥かに楽しい人生を歩んでいるように思えます。りんろうでの出会いや経験は私にとってかけがえのない大切なものです。これからも新たな挑戦や学びに向けて、感謝の気持ちを持って邁進したいと思います。

りんろう講座開設 30 周年、おめでとうございます。

## 神経心理学は心理学か？

滋賀県立総合病院精神科  
鈴木 則夫

ここに「臨床脳病理学」（大橋博司著 1965）という本があります。英語タイトルが「Clinical Neuropsychology」となっています。この頃から、海外では神経心理学という学問名が使用され始めたと聞いています。我が国の心理学において、神経心理学はあまりメジャーな位置にはありませんし、「それは心理学じゃなくて医学なんじゃないですか」と言われたこともあります。入学前に心配だったことはこのことでした。ところが、認知症に造詣が深い佐藤眞一先生、旧東京都老人総合研究所の認知神経心理学グループとのご交流深く、神経心理学に理解ある権藤恭之先生に迎えていただき、無事に学位を取得することができました。認知症をはじめとする脳病の臨床に神経心理学は不可欠な学問だと思っています。我が国の神経心理学の発展、普及に浅学、微力ながら力を尽くしたいと存じています。

## 「りんろう」での9年間の学び

立命館大学総合心理学部  
春日 彩花

臨床死生学・老年行動学研究分野が講座開設30周年を迎えられましたこと、誠におめでとうございます。また、30年の歴史の中では新参者の私が本稿執筆の機会をいただきましたことに、御礼申し上げます。

私は修士課程まで別の大学で学び、博士後期課程から本研究室に受け入れていただきました。進学当初は、研究室の凝集性の高さや、海外研究者との交流の多さ、ゼミや研究会での議論の活発さに、圧倒されるばかりでした。「えらいところに来てしまった」と思ったのも1度や2度ではありません。そんな私が、それでも何とか博士論文を提出できたのは、ひとえに先生方をはじめ、周囲の方々のお力添えあってのことでした。

りんろうでは、学生として、研究員として、教員として、9年の時間を過ごしました。その間、本当に多くのことを学ばせていただきました。先生方には海外留学や研究の機会を多々与えていただき、大変貴重な経験をさせていただきました。学年や年齢を超えた研究室メンバーとの交流も、とても有意義なものでした。在学中からSONIC調査に携わることができたのも幸いでした。SONICを通じて他分野の先生方と接し、その研究に触れることで、より多面的に発達を捉える姿勢を学ぶことができました。何より多くの調査参加者と出会い、多種多様な人生や価値観に触れたことは、人生と研究活動の両面において、かけがえない財産となりました。りんろうは学びの宝庫です。今後ともりんろうで得た学びを糧に、精進していく所存です。

末筆ではありますが、改めまして、この度はおめでとうございます。臨床死生学・老年行動学研究分野の更なる発展と、関係者の皆様の今後益々のご活躍を、心より祈念しております。

## りんろうでの出会いと学び

国立長寿医療研究センター研究所  
久保田 彩

臨床死生学・老年行動学研究分野の講座開設30周年、誠におめでとうございます。

本稿を執筆するに当たって、ふと思い出した場面があります。学部に入学した4月、51講義室で、講座一覧が掲載されたパンフレットが配られました。パンフレットを開くと、臨床死生学・老年行動学という名前がぱっと目に入ってきて、死や老いも研究のテーマとなるのか、となんだか心に残りました。今振り返ると、講座名に惹かれたあの時、りんろうとの出会いに開かれていたのだなと思います。学部は異なる講座で学びましたが、その後、修士課程、博士課程、そして、行動学系の助教として1年、(随分?)長きにわたり大変お世話になりました。長くいたことで、その間、たくさんのお会いがありました。私が修士に入った年がちょうど研究室の引っ越しのタイミングで、社会心理学研究分野と合同院生室になり、行動学系の他の院生も含めて研究会などが活発に行われ、大きな刺激となりました。講座内でも、国内外の研究者の滞在、特養で職員の方と共同プロジェクトなど、様々な人と関わる機会を設けていただきました。こうした研究室としてのopennessの高さが、りんろうの良いところのひとつだと思います。また、在籍期間が異っても、学会などで先輩方との繋がりが広がっていくのも、この研究室の魅力だと感じています。

研究に関して言えば、私はもともと「死」が関心の中心ですが、りんろうでの日々を通して、死だけでなく、生老病死のそのどれもが人間には統制できないことであり、それが四苦と言われるゆえんを感じました。それと同時に、生老病死に携わる人間を科学することの興味深さも知りました。まだまだ学びの途中ですが、「人は死とともにどう生きることができるのか」を研究上の大きな問いとして、これからも精進していきたいと思っています。

末筆となりましたが、臨床死生学・老年行動学研究分野が多くの人々の学びと場として長く発展していくこと、および、関係各位のご活躍を心からお祈り申し上げます。